

形式的冪級数

MATHEMATICS.PDF

2011-01-26

目次

1	級数の和	3
2	級数の積	4
3	形式的冪級数	9
4	無限和と代入	17
5	多項式	18
6	Laurent 展開	21
7	形式的微分	22
8	陰関数定理と逆関数定理	26

最初に、記号についての注意事項を述べておく。

\mathbb{N} を自然数全体からなる集合とする。自然数には 0 を含むものとする。

可換環というときには、単位元をもつ可換環を意味する。

集合 X に対して、 X^n を n 個の X からなる直積とする。また、集合 X, Y に対して、 $\text{Map}(X, Y)$ を集合 X から Y への写像全体からなる集合とする。

一般に、 i, j 等の太字のアルファベットは直積集合の元を表す。特に断りのないとき、 i の各成分を i_1, i_2, \dots で表すものとする。また、 0 はすべての成分が 0 であるような元を表す。

1 級数の和

R を可換環、 n を正の整数とする。

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g と \mathbb{N}^n の元 i に対して、

$$(f + g)(i) = f(i) + g(i)$$

と定義する。このとき、写像

$$f + g : \mathbb{N}^n \longrightarrow R, \quad i \longmapsto (f + g)(i) \tag{1}$$

もまた $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元である。これを和として、 $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ における加法を定める。

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f が定数であるとは、 R のある元 a が存在して、 \mathbb{N}^n の任意の元 i に対して

$$f(i) = \begin{cases} a, & i = (0, 0, \dots, 0) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外のとき} \end{cases}$$

が成り立つときにいう。このような f を f_a と書くことにする。

[定理 1.1] $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ は加法群をなす。

[証明] $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ が加法群の定義を満たすことを 1 つ 1 つ確かめればよい。

結合法則： $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g, h と \mathbb{N}^n の元 i に対して

$$\begin{aligned} ((f + g) + h)(i) &= (f + g)(i) + h(i) \\ &= (f(i) + g(i)) + h(i) \\ &= f(i) + (g(i) + h(i)) \\ &= f(i) + (g + h)(i) \\ &= (f + (g + h))(i). \end{aligned}$$

ゆえに、 $(f + g) + h = f + (g + h)$ 。

交換法則 : $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g と \mathbb{N}^n の元 i に対して

$$\begin{aligned}(f + g)(i) &= f(i) + g(i) \\ &= g(i) + f(i) \\ &= (g + f)(i).\end{aligned}$$

ゆえに, $f + g = g + f$.

単位元の存在 : 0 を R の零元とすると, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の加法についての単位元は定数 f_0 である . 実際 , $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f , と \mathbb{N}^n の元 i に対して

$$\begin{aligned}(f + f_0)(i) &= f(i) + f_0(i) = f(i), \\ (f_0 + f)(i) &= f_0(i) + f(i) = f(i).\end{aligned}$$

ゆえに, $f + f_0 = f_0 + f = f$.

逆元の存在 : $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f に対して , $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 g を

$$g : \mathbb{N}^n \longrightarrow R, \quad i \longmapsto -f(i)$$

と定義する . g は加法における f の逆元である . 実際 \mathbb{N}^n の任意の元 i に対して

$$\begin{aligned}(f + g)(i) &= f(i) + g(i) = 0, \\ (g + f)(i) &= g(i) + f(i) = 0.\end{aligned}$$

ゆえに, $f + g = g + f = f_0$.

以上より , $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ が加法群をなすことが示された .

□

2 級数の積

R を可換環, n を正の整数とする .

\mathbb{Z}^n の元 $i = (i_1, i_2, \dots, i_n)$, $j = (j_1, j_2, \dots, j_n)$ に対して ,

$$i + j = (i_1 + j_1, i_2 + j_2, \dots, i_n + j_n)$$

と定める .

[補題 2.1] m を正の整数, $k \in \mathbb{N}$ とする . このとき, \mathbb{N}^m の元 (x_1, x_2, \dots, x_m) で

$$x_1 + x_2 + \dots + x_m = k$$

を満たすものの個数 $p_{m,k}$ は有限である .

[証明] m に関する数学的帰納法によって証明する.

$m = 1$ のとき, $p_{1,k} = 1$ である.

$m = 2$ のとき, k に対して

$$x + y = k$$

を満たす \mathbb{N}^2 の元 (x, y) は

$$(0, k), (1, k-1), (2, k-2), \dots, (k, 0)$$

の $k+1$ 個である.

$m = 3$ のとき, k に対して

$$x + y + z = k$$

を満たす \mathbb{N}^3 の元 (x, y, z) の個数は, x を動かすとき

$$y + z = k - x$$

なる \mathbb{N}^2 の元 (y, z) の個数すべての和に一致する. この場合

$(0, *, *)$ なる形の元の個数は $p_{2,k}$ 個,

$(1, *, *)$ なる形の元の個数は $p_{2,k-1}$ 個,

.....

$(k, *, *)$ なる形の元の個数は $p_{2,0}$ 個.

ゆえに,

$$\begin{aligned} p_{3,k} &= p_{2,k} + p_{2,k-1} + \dots + p_{2,0} \\ &= (k+1) + k + \dots + 1 \\ &= \frac{1}{2}(k+1)(k+2). \end{aligned}$$

一般に, $m \geq 2$ のとき, k に対して

$$x_1 + x_2 + \dots + x_m = k$$

を満たす \mathbb{N}^m の元 (x_1, x_2, \dots, x_m) の個数は, x_m を動かすとき

$$x_1 + x_2 + \dots + x_{m-1} = k - x_m$$

なる \mathbb{N}^{m-1} の元 $(x_1, x_2, \dots, x_{m-1})$ の個数すべての和に一致する. すなわち,

$$p_{m,k} = p_{m-1,k} + p_{m-1,k-1} + \dots + p_{m-1,0}.$$

したがって, m に関する帰納法により, $p_{m,k}$ が有限であることが示される. □

[補題 2.2] m を正の整数とし, $i = (i_1, i_2, \dots, i_n)$ を \mathbb{N}^n の元とする. このとき

$$S_{m,i} = \{(s_1, s_2, \dots, s_m) \in (\mathbb{N}^n)^m \mid s_1 + s_2 + \dots + s_m = i\}$$

は有限集合である.

[証明] \mathbb{N}^n の m 個の元 s_1, s_2, \dots, s_m を

$$s_l = (s_{l1}, s_{l2}, \dots, s_{ln}) \quad (l = 1, 2, \dots, m)$$

とおく. $(\mathbb{N}^n)^m$ の元 (s_1, s_2, \dots, s_m) が $S_{m,i}$ の元であるための必要十分条件は,

$$s_{1j} + s_{2j} + \dots + s_{mj} = i_j \quad (j = 1, 2, \dots, n)$$

が成り立つことである. 一方, 補題 2.1 より, \mathbb{N} の任意の元 k に対して, \mathbb{N}^n の元 (x_1, x_2, \dots, x_m) で

$$x_1 + x_2 + \dots + x_m = k$$

を満たすものの個数は有限である. したがって, $S_{m,i}$ の元は有限個しかない. □

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g と \mathbb{N}^n の元 i に対して,

$$(fg)(i) = \sum_{s+t=i} f(s)g(t) \quad (2)$$

と定義する. 補題 2.2 より, 右辺は有限和である. このとき, 写像

$$fg : \mathbb{N}^n \longrightarrow R, \quad i \longmapsto (fg)(i) \quad (3)$$

もまた $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元である. これを積として, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ における乗法を定める.

[定理 2.3] $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ は可換環をなす.

[証明] $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ が加法群になることは定理 1.1 で既に示されているので, あとは乗法が可換環の定義を満たしていることを確かめればよい.

結合法則: $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g, h と \mathbb{N}^n の元 i に対して,

$$\begin{aligned} ((fg)h)(i) &= \sum_{r+u=i} (fg)(r)h(u) \\ &= \sum_{r+u=i} \left(\sum_{s+t=r} f(s)g(t) \right) h(u) \\ &= \sum_{s+t+u=i} f(s)g(t)h(u) \\ &= \sum_{s+v=i} f(s) \left(\sum_{t+u=v} g(t)h(u) \right) \\ &= \sum_{s+v=i} f(s)(gh)(v) \\ &= (f(gh))(i). \end{aligned}$$

ゆえに, $(fg)h = f(gh)$.

交換法則: $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g と \mathbb{N}^n の元 i に対して,

$$\begin{aligned}(fg)(i) &= \sum_{s+t=i} f(s)g(t) \\ &= \sum_{s+t=i} g(t)f(s) \\ &= \sum_{s+t=i} g(s)f(t) \\ &= (gf)(i).\end{aligned}$$

ゆえに, $fg = gf$.

分配法則: $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f, g, h と \mathbb{N}^n の元 i に対して,

$$\begin{aligned}((f+g)h)(i) &= \sum_{s+t=i} (f+g)(s)h(t) \\ &= \sum_{s+t=i} (f(s)+g(s))h(t) \\ &= \sum_{s+t=i} (f(s)h(t)+g(s)h(t)) \\ &= \sum_{s+t=i} f(s)h(t) + \sum_{s+t=i} g(s)h(t) \\ &= (fh)(i) + (gh)(i).\end{aligned}$$

ゆえに, $(f+g)h = fh + gh$. さらに, 積についての交換法則を 2 回用いれば,

$$f(g+h) = (g+h)f = gf + hf = fg + fh.$$

単位元の存在: R の乗法についての単位元を 1 とすると, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の単位元は定数 f_1 である. 実際, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f と \mathbb{N}^n の元 i に対して

$$\begin{aligned}(ff_1)(i) &= \sum_{s+t=i} f(s)f_1(t) \\ &= f(i)f_1(0, \dots, 0) + \sum_{\substack{s+t=i \\ t \neq (0,0,\dots,0)}} f(s)f_1(t) \\ &= f(i)f_1(0, \dots, 0) \\ &= f(i).\end{aligned}$$

ゆえに, $ff_1 = f$.

以上より, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ が可換環をなすことが示された. □

[定理 2.4] 定数全体の集合を $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c$ とおく: $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c = \{f_a \mid a \in R\}$.

- (i) $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c$ は $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の部分環である .
- (ii) $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c$ と R とは同型である .

[証明] (i) $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c$ は少なくとも定数 f_0 を含むので空集合でない.
 R の元 a, b と \mathbb{N}^n の元 i に対して

$$\begin{aligned} (f_a - f_b)(i) &= f_a(i) - f_b(i) \\ &= \begin{cases} a - b, & i = (0, 0, \dots, 0) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外するとき.} \end{cases} \end{aligned}$$

ゆえに, $f_a - f_b = f_{a-b} \in C$. また,

$$\begin{aligned} (f_a f_b)(i) &= \sum_{s+t=i} f_a(s) f_b(t) \\ &= \begin{cases} ab, & i = (0, 0, \dots, 0) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外するとき.} \end{cases} \end{aligned}$$

ゆえに, $f_a f_b = f_{ab} \in C$. したがって, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c$ は $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の部分環である .

- (ii) 写像 $\phi: R \rightarrow C, a \mapsto f_a$ を考える.
 ϕ の準同型性: R の任意の元 a, b に対して,

$$\begin{aligned} (f_a + f_b)(i) &= f_a(i) + f_b(i) \\ &= \begin{cases} a + b, & i = (0, 0, \dots, 0) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外するとき.} \end{cases} \end{aligned}$$

ゆえに, $f_a + f_b = f_{a+b}$.

- ϕ の単射性: R の元 a に対して,

$$\begin{aligned} f_a = f_b &\implies f_{a-b} = f_a - f_b = f_0 \\ &\implies a - b = 0 \\ &\implies a = b. \end{aligned}$$

ϕ の全射性: 定数の定義から明らか .

以上より, ϕ は環の同型写像である . □

定理 2.4 により, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_c$ を R と同一視するすることができる . そこで以後, 定数 f_a を単
 に a と書くことにする .

3 形式的冪級数

R を可換環, n を正の整数とする.

自然数 k ($1 \leq k \leq n$) に対して, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 X_k を次のように定義する:

$$X_k : \mathbb{N}^n \longrightarrow R, \quad i \longmapsto X_k(i).$$

ただし,

$$X_k(i) = \begin{cases} 1, & i = (\overbrace{0, \dots, 0}^k, 1, 0, \dots, 0) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外のとき.} \end{cases}$$

この X_1, X_2, \dots, X_k を変数あるいは不定元という.

[定理 3.1] e を正の整数とし, f_1, f_2, \dots, f_e を $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元とする¹⁾. \mathbb{N}^n の任意の元 i に対して

$$(f_1 f_2 \cdots f_e)(i) = \sum_{r_1 + \cdots + r_e = i} f_1(r_1) \cdots f_e(r_e)$$

が成り立つ.

[証明] e に関する数学的帰納法により証明する. 積の定義から $e = 2$ のときは成り立つ. 一般に, $e > 2$ のとき, 帰納法の仮定より,

$$\begin{aligned} (f_1 f_2 \cdots f_e)(i) &= \sum_{s+r_e=i} (f_1 f_2 \cdots f_{e-1})(s) f_e(r_e) \\ &= \sum_{s+r_e=i} \left(\sum_{r_1+\cdots+r_{e-1}=s} f_1(r_1) \cdots f_{e-1}(r_{e-1}) \right) f_e(r_e) \\ &= \sum_{r_1+\cdots+r_e=i} f_1(r_1) \cdots f_e(r_e) \end{aligned}$$

となる. □

各 $k = 1, 2, \dots, n$ に対して, $X_k^0 = 1$ と定める.

e を自然数とする. このとき, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 X_k^e は, 定理 3.1 より, \mathbb{N}^n の任意の元 i に対して

$$\begin{aligned} X_k^e(i) &= \overbrace{(X_k \cdots X_k)}^e(i) \\ &= \begin{cases} 1, & i = (\overbrace{0, \dots, 0}^k, e, 0, \dots, 0) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外のとき.} \end{cases} \end{aligned}$$

となるような写像である.

¹⁾ただし, f_1, f_2, \dots, f_e は $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元に番号をつけたものであり, 定数とは限らない.

さらに, a を R の元, e_1, e_2, \dots, e_n を自然数とすると, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 $aX_1^{e_1} \cdots X_n^{e_n}$ は, 定理 3.1 より, \mathbb{N}^n の任意の元 i に対して

$$aX_1^{e_1} \cdots X_n^{e_n} = \begin{cases} a, & i = (e_1, \dots, e_n) \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外} \text{ のとき.} \end{cases}$$

となるような写像である. この形で表される $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元を単項式という.

単項式 $aX_1^{e_1} \cdots X_n^{e_n} \neq 0$ に対して, $e_1 + e_2 + \cdots + e_n$ をこの単項式の次数という.

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f と \mathbb{N}^n の元 $i = (i_1, \dots, i_n)$ に対して,

$$a_i = f(i) \ (\in R)$$

とおく. このとき

$$f(i) = a_i = a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}(i).$$

一方, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 $a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}$ は, \mathbb{N}^n の元 j について

$$j \neq i \implies a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}(j) = 0.$$

そこで, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f を

$$\sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} \tag{4}$$

で表す. また, f のことを $f(X_1, X_2, \dots, X_n)$ のように変数を明示して書くこともある.

$n = 1$ のとき, すなわち f が 1 変数の形式的冪級数であるとき, (4) は

$$\sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i$$

となるが, そのほかに,

$$\sum_{i=0}^{\infty} a_i X^i$$

あるいは

$$a_0 + a_1 X + a_2 X^2 + \cdots$$

などといった書き方をすることもある.

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元 f を (4) の形で表したとき, 各々の $a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}$ を f の項といい, a_i をその項の係数という. 特に, $i = (0, 0, \dots, 0)$ なる項を定数項という.

[注意 3.1] (4) は, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元を記号 \sum を用いて形式的に表したにすぎず, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元が単項式の無限和で表されると主張しているわけではない.

直感的には, \mathbb{N}^n の元 i に対して,

$$\begin{aligned} \left(\sum_{j \in \mathbb{N}^n} a_j X_1^{j_1} \cdots X_n^{j_n} \right) (i) &= (a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n})(i) + \left(\sum_{j \neq i} a_j X_1^{j_1} \cdots X_n^{j_n} \right) (i) \\ &= (a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n})(i) \\ &= a_i \end{aligned}$$

であるから,

$$f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}$$

となる, という具合である. けれども, このような操作はあくまで記号の形式的な書き換えである.

次の定理は, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元についての基本的な性質を, (4) の記法を使って書き直したものである:

- [定理 3.2] (i) $\sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} = 0 \iff a_i = 0 \ (\forall i \in \mathbb{N}^n)$.
- (ii) $\sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} + \sum_{i \in \mathbb{N}^n} b_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} (a_i + b_i) X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}$.
- (iii) $\left(\sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} \right) \left(\sum_{i \in \mathbb{N}^n} b_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} \right) = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} \left(\sum_{s+t=i} a_s b_t \right) X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}$.

[証明] (i) は, f を $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の元とすると,

$$f = 0 \iff f(i) = 0 \ (\forall i \in \mathbb{N}^n)$$

を意味する. (ii), (iii) は, それぞれ $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ における和および積の定義を言い換えたものである. □

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ に (1), (3) のようにして和と積を定義して構成した可換環を, R の元を係数とする n 変数の形式的冪級数環といい,

$$R[[X_1, \dots, X_n]]$$

で表す. また, $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元を形式的冪級数という.

[注意 3.2] $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元 f は \mathbb{N}^n から R への写像であるから, 集合としては直積集合 $\prod_{i \in \mathbb{N}^n} R$ と同じである. しかしながら, 環として見るとき, 直積集合に自然に導入される代数的構造²⁾と $R[[X_1, \dots, X_n]]$ のそれとは乗法の定め方で区別される.

[例 3.1] 以下は, 有理数を係数とする 1 変数の形式的冪級数である.

$$\begin{aligned} \exp(X) &= \sum_{i=0}^{\infty} \frac{1}{i!} X^i = 1 + X + \frac{1}{2!} X^2 + \frac{1}{3!} X^3 + \cdots, \\ \log(1 + X) &= \sum_{i=1}^{\infty} \frac{(-1)^{i-1}}{i} X^i = X - \frac{1}{2} X^2 + \frac{1}{3} X^3 - \cdots. \end{aligned}$$

²⁾各成分ごとの積によって乗法を定める.

[例 3.2] R を可換環とし, \mathbb{Q} を部分体として含むとする. $\alpha \in R$ とし,

$$\binom{\alpha}{0} = 1, \quad \binom{\alpha}{i} = \frac{\alpha(\alpha-1)\cdots(\alpha-i+1)}{i!} \quad (i = 1, 2, \dots)$$

とする. このとき, R の元を係数とする 1 変数の形式的冪級数

$$(1+X)^\alpha = \sum_{i=0}^{\infty} \binom{\alpha}{i} X^i.$$

が定まる.

[定理 3.3] $n \geq 2$ を整数, R を可換環とする. このとき, $r = 1, 2, \dots, n-1$ に対して

$$R[[X_1, \dots, X_n]] \cong (R[[X_1, \dots, X_r]])[[X_{r+1}, \dots, X_n]]$$

が成り立つ.

[証明] $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の各々の元

$$\sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n} \quad (5)$$

に対して, $(R[[X_1, \dots, X_r]])[[X_{r+1}, \dots, X_n]]$ の元

$$\sum_{k \in \mathbb{N}^{n-r}} \left(\sum_{j \in \mathbb{N}^r} a_{j,k} X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r} \right) X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \quad (6)$$

を対応させる写像を ϕ とする. (6) に対して (5) を対応させる写像が ϕ の逆写像になるので, ϕ は全単射である.

$R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元

$$f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n},$$

$$g = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} b_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$$

を任意にとる. また,

$$f_k = \sum_{j \in \mathbb{N}^r} a_{j,k} X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r},$$

$$g_k = \sum_{j \in \mathbb{N}^r} b_{j,k} X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r}$$

とおく. このとき, 各 $k \in \mathbb{N}^{n-r}$ に対して

$$f_k + g_k = \sum_{j \in \mathbb{N}^r} (a_{j,k} + b_{j,k}) X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r}$$

であるから,

$$\begin{aligned}
\phi(f+g) &= \phi\left(\sum_{i \in \mathbb{N}^n} (a_i + b_i) X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}\right) \\
&= \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} \left(\sum_{j \in \mathbb{N}^r} (a_{j,\mathbf{k}} + b_{j,\mathbf{k}}) X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r} \right) X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \\
&= \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} (f_{\mathbf{k}} + g_{\mathbf{k}}) X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \\
&= \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} f_{\mathbf{k}} X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} + \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} g_{\mathbf{k}} X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \\
&= \phi(f) + \phi(g).
\end{aligned}$$

また, 各 $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in \mathbb{N}^{n-r}$ に対して

$$f_{\mathbf{u}} g_{\mathbf{v}} = \sum_{j \in \mathbb{N}^r} \left(\sum_{\mathbf{p}+\mathbf{q}=j} a_{\mathbf{p},\mathbf{u}} b_{\mathbf{q},\mathbf{v}} \right) X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r}$$

であるから,

$$\begin{aligned}
\phi(fg) &= \phi\left(\sum_{i \in \mathbb{N}^n} \left(\sum_{s+t=i} a_s b_t\right) X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n}\right) \\
&= \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} \left(\sum_{j \in \mathbb{N}^r} \left(\sum_{\mathbf{u}+\mathbf{v}=\mathbf{k}} \left(\sum_{\mathbf{p}+\mathbf{q}=j} a_{\mathbf{p},\mathbf{u}} b_{\mathbf{q},\mathbf{v}} \right) \right) X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r} \right) X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \\
&= \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} \left(\sum_{\mathbf{u}+\mathbf{v}=\mathbf{k}} \left(\sum_{j \in \mathbb{N}^r} \left(\sum_{\mathbf{p}+\mathbf{q}=j} a_{\mathbf{p},\mathbf{u}} b_{\mathbf{q},\mathbf{v}} \right) X_1^{j_1} \cdots X_r^{j_r} \right) \right) X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \\
&= \sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} \left(\sum_{\mathbf{u}+\mathbf{v}=\mathbf{k}} f_{\mathbf{u}} g_{\mathbf{v}} \right) X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \\
&= \left(\sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} f_{\mathbf{k}} X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \right) \left(\sum_{\mathbf{k} \in \mathbb{N}^{n-r}} g_{\mathbf{k}} X_{r+1}^{k_{r+1}} \cdots X_n^{k_n} \right) \\
&= \phi(f)\phi(g).
\end{aligned}$$

ゆえに, ϕ は準同型写像である. □

[定理 3.4] R が整域ならば, $R[[X_1, \dots, X_n]]$ も整域である.

[証明] n に関する数学的帰納法により証明する.

$n = 1$ のとき. $R[[X]]$ の元 $f = \sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i$, $g = \sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i$ はともに 0 でないとし, a_k, b_l をそれぞれ 0 でない最初の係数とする. このとき,

$$fg = \sum_{i \in \mathbb{N}} \left(\sum_{s+t=i} a_s b_t \right) X^i$$

の X^{k+l} の係数を見ると, $a_k b_l \neq 0$ かつ $a_k b_l$ 以外の項はすべて 0 である. したがって, $fg \neq 0$.

一般に, $n-1$ のとき定理の主張が正しいと仮定すると, 定理 3.3 と $n=1$ のときの議論より, n のときも正しいことがいえる. \square

[定理 3.5] $f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$ を $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元とする. このとき, 次の 2 つの条件は同値である.

- (i) $R[[X_1, \dots, X_n]]$ において f は乘法についての逆元をもつ.
- (ii) R において a_0 は乘法についての逆元をもつ. ここで, $\mathbf{0} = (0, 0, \dots, 0)$ とする.

[証明] n に関する数学的帰納法により証明する.

$n=1$ のとき.

(i) \Rightarrow (ii) $R[[X]]$ において f が乘法についての逆元をもつとすると, ある $g = \sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i \in R[[X]]$ が存在して,

$$\left(\sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i \right) \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i \right) = 1.$$

定数項を比較すると, $a_0 b_0 = 1$ となる. ゆえに, R において a_0 は乘法についての逆元をもつ.

(ii) \Rightarrow (i) a_0 が R の可逆元であるとする. このとき,

$$\begin{aligned} b_0 &= a_0^{-1}, \\ b_i &= -a_0^{-1} \cdot \sum_{s=1}^i a_s b_{i-s} \quad (i = 1, 2, \dots) \end{aligned}$$

よって R の元の列 $(b_i \mid i \in \mathbb{N})$ を定めると,

$$a_0 b_0 = 1, \quad \sum_{s=0}^i a_s b_{i-s} = 0 \quad (i = 1, 2, \dots)$$

だから,

$$\left(\sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i \right) \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i \right) = \sum_{i \in \mathbb{N}} \left(\sum_{s=0}^i a_s b_{i-s} \right) X^i = 1.$$

したがって, $R[[X]]$ において f は乘法についての逆元をもつ.

一般の場合を証明するために, $n-1$ のとき定理の主張が正しいと仮定する.

$R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元

$$f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$$

が逆元をもつための必要十分条件は, 定理 3.3 と $n=1$ のときの議論より,

$$\sum_{j \in \mathbb{N}^{n-1}} a_{j,0} X_1^{j_1} X_2^{j_2} \cdots X_{n-1}^{j_{n-1}}$$

が $R[[X_1, \dots, X_{n-1}]]$ において逆元をもつことである. 帰納法の仮定より, このことは a_0 が R において逆元をもつことと同値である. \square

定理 3.5 より,

$$R[[X_1, \dots, X_n]]^\times = \left\{ \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n} \in R[[X_1, \dots, X_n]] \mid a_0 \in R^\times \right\}$$

と書ける.

[例 3.3] $1 - X$ の $R[[X]]$ における逆元は,

$$\sum_{i=0}^{\infty} X^i = 1 + X + X^2 + X^3 + \cdots$$

である. また, $1 + X$ の $R[[X]]$ における逆元は,

$$\sum_{i=0}^{\infty} (-1)^i X^i = 1 - X + X^2 - X^3 + \cdots$$

である.

形式的冪級数 $f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n} \neq 0$ に対して,

$$\text{ord } f = \min \left\{ \sum_{k=1}^n i_k \mid a_i \neq 0 \right\}$$

と定める. $\text{ord } f$ を f の位数という. すなわち, f の中に現れる 0 でない係数をもつ項の次数の最小値を f の位数とする. 0 の位数は ∞ と定める. したがって, $\text{ord } f$ の値は負でない整数か ∞ である.

[定理 3.6] $f, g \in R[[X_1, \dots, X_n]]$ とする.

- (i) $\text{ord}(f + g) \geq \min\{\text{ord } f, \text{ord } g\}$. さらに, $\text{ord } f \neq \text{ord } g$ ならば等号が成り立つ.
- (ii) $\text{ord}(fg) \geq \text{ord } f + \text{ord } g$. さらに, R が整域ならば等号が成り立つ.
- (iii) $f \in R[[X_1, \dots, X_n]]^\times$ ならば $\text{ord } f = \text{ord } f^{-1} = 0$.
- (iv) R は体であるとする. このとき, $\text{ord } f = 0$ ならば $f \in R[[X_1, \dots, X_n]]^\times$.

[証明] $m = \text{ord } f, m' = \text{ord } g$ とおく. $m \leq m'$ と仮定しても一般性を失わない. また,

$$\begin{aligned} f &= f_m + (m + 1 \text{ 次以上の項}), & f_m &\neq 0, \\ g &= g_{m'} + (m' + 1 \text{ 次以上の項}), & g_{m'} &\neq 0 \end{aligned}$$

と表す. ただし, f_m は f の中に現れる m 次の項すべての和であり, $g_{m'}$ についても同様である.

(i) $f + g$ は

$$f + g = f_m + g_m + (m + 1 \text{ 次以上の項})$$

と表せるから, (i) の前半の不等式が成り立つ. さらに, $m < m'$ ならば, $g_m = 0$ である. すなわち, $f_m + g_m = f_m \neq 0$ であるから, $\text{ord}(f + g) = \text{ord } f$ となる.

(ii) fg は

$$fg = f_m g_{m'} + (m + m' + 1 \text{ 次以上の項})$$

と表せるから, (ii) の前半の不等式が成り立つ. さらに, R が整域ならば, 定理 3.4 より $R[[X_1, \dots, X_n]]$ も整域である. よって, $f_m g_{m'} \neq 0$ となり, $\text{ord}(fg) = m + m'$ がいえる.

(iii) $f \in R[[X_1, \dots, X_n]]^\times$ とすると, 定理 3.5 より

$$f = a_0 + (1 \text{ 次以上の項}), \quad a_0 \in R^\times.$$

また, $ff^{-1} = 1$ であり, この式の定数項を比較すれば, f^{-1} の定数項は a_0^{-1} である. ゆえに, $\text{ord } f = \text{ord } f^{-1} = 0$.

(iv) R は体であるとし, $\text{ord } f = 0$ とする. R の 0 でないすべての元は乗法についての逆元をもち, f の定数項は 0 でないから, 定理 3.5 より $f \in R[[X_1, \dots, X_n]]^\times$ が得られる. \square

定数項が 0 であるような形式的冪級数の全体を $R[[X_1, \dots, X_n]]_0$ で表す:

$$R[[X_1, \dots, X_n]]_0 = \{f \in R[[X_1, \dots, X_n]] \mid \text{ord } f \geq 1\}.$$

[定理 3.7] $R[[X_1, \dots, X_n]]_0$ は $R[[X_1, \dots, X_n]]$ のイデアルである.

[証明] $R[[X_1, \dots, X_n]]_0$ は 0 を含むから空集合でない.

$f, g \in R[[X_1, \dots, X_n]]_0, h \in R[[X_1, \dots, X_n]]$ とする. 定理 3.6 より,

$$\text{ord}(f + g) \geq \min\{\text{ord } f, \text{ord } g\} \geq 1,$$

$$\text{ord}(-g) = \text{ord } g \geq 1,$$

$$\text{ord}(hf) \geq \text{ord } h + \text{ord } f \geq 1$$

であるから, $f + g, -g, hf \in R[[X_1, \dots, X_n]]_0$. ゆえに, $R[[X_1, \dots, X_n]]_0$ は $R[[X_1, \dots, X_n]]$ のイデアルである. \square

$R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元 f, g と整数 $d \geq 0$ に対して,

$$f \equiv g \pmod{\text{deg } d} \iff \text{ord}(f - g) \geq d$$

と定める. これは $R[[X_1, \dots, X_n]]$ における同値関係である. また, このことは f と g の $d-1$ 次以下の項がすべて等しいことと同値である. $n=1$ のときは,

$$f \equiv g \pmod{\text{deg } d} \iff f - g \in X^d R[[X]]$$

と言い換えられる.

[定理 3.8] $f, g \in R[[X_1, \dots, X_n]]$ とする. このとき, $f = g$ であるための必要十分条件は, すべての整数 $d \geq 0$ に対して $f \equiv g \pmod{\text{deg } d}$ が成り立つことである.

[証明] 条件の必要性は明らかだから, 十分性のみ証明する.

$f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$, $g = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} b_i X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$ とおくと,

$$f - g = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} (a_i - b_i) X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}.$$

このとき, 各 $d \geq 0$ に対して,

$$\begin{aligned} f &\equiv g \pmod{\deg d} \implies \text{ord}(f - g) \geq d \\ &\implies a_i - b_i = 0 \quad (i_1 + i_2 + \cdots + i_n < d \text{ のとき}). \end{aligned}$$

d は任意だから, すべての i に対して $a_i - b_i = 0$ が成り立ち, $f = g$ となる. □

4 無限和と代入

R を可換環, n を正の整数とする.

Λ を添字の無限集合とし, $(f_\lambda \mid \lambda \in \Lambda)$ を $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元の列とする. 各 $\lambda \in \Lambda$ に対して,

$$f_\lambda = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i^{(\lambda)} X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$$

とおく. さらに, 各 $i \in \mathbb{N}^n$ に対して,

$$\Lambda_i = \{\lambda \in \Lambda \mid a_i^{(\lambda)} \neq 0\}$$

とおく. このとき, 条件

(S) 任意の $i \in \mathbb{N}^n$ に対して, $|\Lambda_i| < \infty$.

を満たせば, 各 i に対して $\sum_{\lambda \in \Lambda_i} a_i^{(\lambda)}$ は有限和である. よって, 新たな $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元

$$\sum_{i \in \mathbb{N}^n} \left(\sum_{\lambda \in \Lambda_i} a_i^{(\lambda)} \right) X_1^{i_1} X_2^{i_2} \cdots X_n^{i_n}$$

が定まる. これを $(f_\lambda \mid \lambda \in \Lambda)$ の無限和といい, $\sum_{\lambda \in \Lambda} f_\lambda$ と書く. また, 条件 (S) が成り立つとき, $(f_\lambda \mid \lambda \in \Lambda)$ は総和可能であるという.

$f_1, f_2, \dots, f_m \in R[[X_1, \dots, X_n]]$, $g \in R[[Y_1, \dots, Y_m]]$ とし³⁾,

$$g = \sum_{j \in \mathbb{N}^m} b_j Y_1^{j_1} Y_2^{j_2} \cdots Y_m^{j_m}$$

とおく. もし, $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の元の列

$$(b_j f_1^{j_1} f_2^{j_2} \cdots f_m^{j_m} \mid j \in \mathbb{N}^m)$$

³⁾ $R[[Y_1, \dots, Y_m]]$ の特別な場合として $R[[X_1, \dots, X_n]]$ 自身も含まれる.

が総和可能, すなわち条件 (S) を満たすならば, その無限和

$$\sum_{\mathbf{j} \in \mathbb{N}^m} b_{\mathbf{j}} f_1^{j_1} f_2^{j_2} \cdots f_m^{j_m} \in R[[X_1, \dots, X_n]]$$

が定まる. これを f_1, f_2, \dots, f_m の g への代入といい,

$$g(f_1, f_2, \dots, f_m)$$

で表す.

$f_1, f_2, \dots, f_m \in R[[X_1, \dots, X_n]]_0, g \in R[[Y_1, \dots, Y_m]]$ のとき, 各 $\mathbf{j} \in \mathbb{N}^m$ に対して, 定理 3.6 より

$$\begin{aligned} \text{ord}(b_{\mathbf{j}} f_1^{j_1} f_2^{j_2} \cdots f_m^{j_m}) \\ \geq \sum_{k=1}^m \text{ord} f_k^{j_k} \geq j_1 + j_2 + \cdots + j_m \end{aligned}$$

であるから, 列 $(b_{\mathbf{j}} f_1^{j_1} f_2^{j_2} \cdots f_m^{j_m} \mid \mathbf{j} \in \mathbb{N}^m)$ は総和可能である. したがって, f_1, f_2, \dots, f_m の g への代入が可能である.

特に, $0, 0, \dots, 0$ の g への代入 $g(0, 0, \dots, 0)$ は, g の定数項 b_0 に一致する.

5 多項式

R を可換環, n を正の整数とする.

[定理 5.1] $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の部分集合

$$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_{\text{pol}} = \{f \in M \mid \text{有限個の } i \in \mathbb{N}^n \text{ を除いて } f(i) = 0\}$$

は, 和と積を (1), (3) のように定義した環として $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)$ の部分環をなす.

[証明] まず, $\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_{\text{pol}}$ は明らかに 0 を含むから, 空集合でない.

$f, g \in \text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_{\text{pol}}$ とすると, ある自然数 c が存在して, \mathbb{N}^n のすべての元 $\mathbf{i} = (i_1, i_2, \dots, i_n)$ に対して,

$$i_k > c \ (k = 1, 2, \dots, n) \implies f(\mathbf{i}) = g(\mathbf{i}) = 0.$$

このとき,

$$\begin{aligned} i_k > c \ (k = 1, 2, \dots, n) &\implies (f - g)(\mathbf{i}) = f(\mathbf{i}) - g(\mathbf{i}) = 0, \\ i_k > 2c \ (k = 1, 2, \dots, n) &\implies (fg)(\mathbf{i}) = \sum_{\mathbf{s} + \mathbf{t} = \mathbf{i}} f(\mathbf{s})g(\mathbf{t}) = 0. \end{aligned}$$

ゆえに, $f - g, fg \in \text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_{\text{pol}}$ が成り立つ. □

$\text{Map}(\mathbb{N}^n, R)_{\text{pol}}$ を, R の元を係数とする n 変数の多項式環といい,

$$R[X_1, \dots, X_n]$$

で表す. また, $R[X_1, \dots, X_n]$ の元を多項式という.

[例 5.1] m を正の整数とする. このとき,

$$\binom{m}{i} = \begin{cases} \frac{m(m-1)\cdots(m-i+1)}{i!}, & i = 1, 2, \dots \text{ のとき} \\ 1, & i = 0 \text{ のとき} \end{cases}$$

は, $0 \leq i \leq m$ のときは m 個のものの中から i 個を選び出す場合の数であり, $i > m$ のときは 0 である. したがって,

$$(1+X)^m = \sum_{i=0}^{\infty} \binom{m}{i} X^i = \sum_{i=0}^m \binom{m}{i} X^i$$

は整数を係数とする 1 変数の多項式である.

[定理 5.2] $r = 1, 2, \dots, n-1$ に対して

$$R[X_1, \dots, X_n] \cong (R[X_1, \dots, X_r])[X_{r+1}, \dots, X_n]$$

が成り立つ.

[証明] 定理 3.3 の証明において, 写像 ϕ の $R[X_1, \dots, X_n]$ への制限を考えたとき, その像が $(R[X_1, \dots, X_r])[X_{r+1}, \dots, X_n]$ になることに注意すれば, 同様にして証明できる. \square

[定理 5.3] R が整域ならば, $R[X_1, \dots, X_n]$ も整域である.

[証明] R が整域ならば, 定理 3.4 より形式的冪級数環 $R[[X_1, \dots, X_n]]$ は整域である. 多項式環 $R[X_1, \dots, X_n]$ は $R[[X_1, \dots, X_n]]$ の部分環であり, 整域の部分環は整域であるから, $R[X_1, \dots, X_n]$ もまた整域である.

あるいは, 定理 3.4 と同様にして直接証明することもできる. \square

多項式 $f = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i X_1^{i_1} \cdots X_n^{i_n} \neq 0$ に対して,

$$\deg f = \max \left\{ \sum_{k=1}^n i_k \mid a_i \neq 0 \right\}$$

と定める. $\deg f$ を f の次数という. すなわち, f の中に現れる 0 でない係数をもつ項の次数の最大値を f の次数とする. 0 の次数は $-\infty$ と定める.

多項式 $f \neq 0$ が m 次の斉次多項式あるいは同次多項式であるとは, f の中に現れる単項式の次数がすべて m であるときにいう.

[定理 5.4] $f, g \in R[X_1, \dots, X_n]$ とする.

- (i) $\deg(f + g) \leq \max\{\deg f, \deg g\}$. さらに, $\deg f \neq \deg g$ ならば等号が成り立つ.
- (ii) $\deg(fg) \leq \deg f + \deg g$. さらに, R が整域ならば等号が成り立つ.

[証明] $m = \deg f, m' = \deg g$ とおく. $m \leq m'$ と仮定しても一般性を失わない. また,

$$\begin{aligned} f &= (m - 1 \text{ 次以下の項}) + f_m, & f_m &\neq 0, \\ g &= (m' - 1 \text{ 次以下の項}) + g_{m'}, & g_{m'} &\neq 0 \end{aligned}$$

と表す. ただし, f_m は f の中に現れる m 次の項すべての和であり, $g_{m'}$ についても同様である. 便宜上, $f_i = 0 (m < i \leq m')$ としておく.

- (i) $f + g$ は

$$f + g = (m - 1 \text{ 次以下の項}) + f_{m'} + g_{m'}$$

と表せるから, (i) の前半の不等式が成り立つ. さらに, $m < m'$ ならば, $f_{m'} = 0$ である. すなわち, $f_{m'} + g_{m'} = g_{m'} \neq 0$ であるから, $\deg(f + g) = \deg g$ となる.

- (ii) fg は

$$fg = (m + m' - 1 \text{ 次以下の項}) + f_m g_{m'}$$

と表せるから, (ii) の前半の不等式が成り立つ. さらに, R が整域ならば, 定理 5.3 より $R[X_1, \dots, X_n]$ も整域である. よって, $f_m g_{m'} \neq 0$ となり, $\deg(fg) = m + m'$ がいえる. \square

$f_1, f_2, \dots, f_m \in R[[X_1, \dots, X_n]], g \in R[Y_1, \dots, Y_m]$ とし,

$$g = \sum_{j \in \mathbb{N}^m} b_j Y_1^{j_1} Y_2^{j_2} \cdots Y_m^{j_m}$$

とおく. g は多項式なので, $\deg g$ より大きい次数の項はすべて 0 であり, g に現れる 0 でない項の数は有限個である. ゆえに, 列 $(b_j f_1^{j_1} f_2^{j_2} \cdots f_m^{j_m} \mid j \in \mathbb{N}^m)$ は総和可能である. したがって, f_1, f_2, \dots, f_m の g への代入が可能である (§4).

特に, R の元は常に R 係数の多項式へ代入可能である. f を $R[X_1, \dots, X_n]$ の元とするとき, R の元 $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n$ の f への代入

$$f(\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n) = \sum_{i \in \mathbb{N}^n} a_i \alpha_1^{i_1} \alpha_2^{i_2} \cdots \alpha_n^{i_n} \in R$$

を, f の $(\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n) \in R^n$ における値という.

$(\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n) \in R^n$ が f の零点であるとは, $f(\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n) = 0$ となるときにいう. 特に, $n = 1$ のとき, すなわち f が 1 変数であるとき, その零点を f の根という.

[注意 5.1] 数学 (特に代数学) では, 零点 (あるいは根) がどこの環で存在するのかがしばしば問題になる. そのため, 例えば \mathbb{C} を複素数体, \mathbb{R} を実数体, $f \in \mathbb{R}[X]$ とし, $\alpha \in \mathbb{C}$ が $f(\alpha) = 0$ を満たすとき, f は「 \mathbb{C} において」根をもつといい, α は f の「 \mathbb{C} における」根であるという言い方をする.

6 Laurent 展開

K を体, n を正の整数とする.

定理 3.4 より形式的冪級数環 $K[[X_1, \dots, X_n]]$ は整域であるから, その商体が存在する. それを K 上の形式的冪級数体といい, $K((X_1, \dots, X_n))$ で表す.

また, 多項式環 $K[X_1, \dots, X_n]$ は $K[[X_1, \dots, X_n]]$ の部分整域である. その商体を K 上の有理関数体といい, $K(X_1, \dots, X_n)$ で表す. また, その元を有理式という.

$K(X_1, \dots, X_n)$ は $K((X_1, \dots, X_n))$ の部分体である.

$K(X_1, \dots, X_n)$ の任意の元は,

$$\frac{g}{h}, \quad g, h \in K[X_1, \dots, X_n], \quad h \neq 0$$

の形に表される. このうち, $\text{ord } h = 0$ となるもの全体を S とすると, S は $K(X_1, \dots, X_n)$ の部分環になる. このとき, $v \in K[[X_1, \dots, X_n]]^\times$ だから, 写像

$$S \longrightarrow K[[X_1, \dots, X_n]], \quad \frac{g}{h} \longmapsto gh^{-1}$$

が定まり, これは環の同型写像になる. $g/h \in S$ に対して, gh^{-1} を有理式 g/h の展開という.

1 変数の場合には, より著しい結果が得られる.

[定理 6.1] $K((X))$ の 0 でないすべての元 f は,

$$f = X^k u, \quad k \in \mathbb{Z}, \quad u \in K[[X]], \quad \text{ord } u = 0 \quad (7)$$

の形に一意的に表される.

[証明] $K((X))$ は $K[[X]]$ の商体だから, $f = g/h$, $g, h \in K[[X]]$, $g \neq 0$, $h \neq 0$ と表せる. さらに,

$$\begin{aligned} g &= X^r g_1, \quad r \in \mathbb{N}, \quad \text{ord } g_1 \neq 0, \\ h &= X^s h_1, \quad s \in \mathbb{N}, \quad \text{ord } h_1 \neq 0 \end{aligned}$$

と表せる. ゆえに,

$$f = X^{r-s} g_1 h_1^{-1}, \quad g_1 h_1^{-1} \in K[[X]], \quad \text{ord}(g_1 h_1^{-1}) = 0$$

となる.

f が 2 通りに

$$f = X^{k_1} u_1 = X^{k_2} u_2, \quad k_1, k_2 \in \mathbb{N}, \quad u_1, u_2 \in K[[X]], \quad \text{ord } u_1 = \text{ord } u_2 = 0$$

と表されたとすると,

$$X^{k_1 - k_2} = u_2 u_1^{-1} \in K[[X]], \quad \text{ord } u_2 u_1^{-1} = 0$$

であるから, $k_1 - k_2 = 0$. ゆえに, $u_2 u_1^{-1} = 1$ となる. したがって, f を (7) の形で表す仕方は一意的である. □

[注意 6.1] 定理 6.1 を 2 変数以上の場合に拡張することはできない. 例えば, $u(X, Y) \in K[[X, Y]]$ と整数 $m > 0$ で

$$\frac{1}{X+Y} = (XY)^{-m}u(X, Y)$$

を満たすものは存在しない. なぜなら, もし仮にそのような $u(X, Y)$ と $m > 0$ が存在すれば,

$$X^m Y^m = u(X, Y)(X + Y)$$

が成り立つ. 左辺は 0 でないから, $u(X, Y) \neq 0$ でなければならない. よって, $u(X, Y)$ の中には $a_i X^{i_1} Y^{i_2} \neq 0$ なる項が必ず現れる. $i_1 \geq i_2$ のとき右辺には $a_i X^{i_1+1} Y^{i_2}$ なる項が現れ, $i_1 < i_2$ のとき右辺には $a_i X^{i_1} Y^{i_2+1}$ なる項が現れることになって, どちらにしても矛盾が生じる.

(7) において, $u = \sum_{i=0}^{\infty} a_i X^i$ ($a_0 \neq 0$) とおけば,

$$f = \sum_{i=k}^{\infty} a_i X^{k+i} = a_0 X^k + a_1 X^{k+1} + \dots$$

のように表せる. この表し方を f の Laurent 展開という. また, 右辺の形で表された $K((X))$ の元のことを形式的 Laurent 級数という. さらに, k を f の位数といい, $\text{ord } f$ で表す. $\text{ord } f$ の値は整数または ∞ である. $f \in K[[X]]$ のときは §3 において定義した位数の定義に一致する.

7 形式的微分

R を可換環とする.

$R[[X]]$ の元 $f(X) = \sum_{i=0}^{\infty} a_i X^i$ に対して, $R[[X]]$ の元 $f'(X)$ を

$$\begin{aligned} f'(X) &= \sum_{i=0}^{\infty} (i+1)a_{i+1}X^i \\ &= a_1 + 2a_2X + 3a_3X^2 + \dots \end{aligned}$$

によって定める. $f'(X)$ を $f(X)$ の形式的微分という. $f'(X)$ を $\frac{df}{dX}$ と書く.

形式的微分の定め方から,

$$\text{ord } f' \geq 1 \implies \text{ord } f' \geq \text{ord } f - 1 \quad (8)$$

であることがすぐにわかる.

$f(X) \in R[X]$ ならば, $f'(X) \in R[X]$ であり,

$$\text{deg } f \geq 1 \implies \text{deg } f' \leq \text{deg } f - 1 \quad (9)$$

が成り立つ.

[注意 7.1] 任意の整数 $m > 0$ と R の任意の元 $a \neq 0$ に対して $ma \neq 0$ であれば, (8), (9) における \implies の右側の式は等号にできる.

一方, ある整数 $m > 0$ と R のある元 $a \neq 0$ が存在して $ma = 0$ であれば, $(aX^m)' = maX^{m-1} = 0$. したがって, (8), (9) における \implies の右側の式は一般には等号にならない.

[定理 7.1] $f(X), g(X) \in R[[X]]$, $c \in R$ とする.

- (i) $(cf(X))' = cf'(X)$.
- (ii) $(f(X) + g(X))' = f'(X) + g'(X)$.
- (iii) $(f(X)g(X))' = f'(X)g(X) + f(X)g'(X)$.

[証明] $f(X) = \sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i$, $g(X) = \sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i$ とおくと,

$$\begin{aligned} f'(X) &= \sum_{i \in \mathbb{N}} (i+1)a_{i+1}X^i, \\ g'(X) &= \sum_{i \in \mathbb{N}} (i+1)b_{i+1}X^i, \\ (cf(X))' &= \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} ca_i X^i \right)' = \sum_{i \in \mathbb{N}} (i+1)ca_{i+1}X^i, \\ f(X) + g(X) &= \sum_{i \in \mathbb{N}} (a_i + b_i)X^i, \\ (f(X) + g(X))' &= \sum_{i \in \mathbb{N}} (i+1)(a_{i+1} + b_{i+1})X^i. \end{aligned}$$

係数を比較すれば, (i), (ii) の等式が得られる. また,

$$\begin{aligned} f(X)g(X) &= \sum_{i \in \mathbb{N}} \left(\sum_{s+t=i} a_s b_t \right) X^i, \\ (f(X)g(X))' &= \sum_{i \in \mathbb{N}} \left((i+1) \sum_{s+t=i+1} a_s b_t \right) X^i, \\ f'(X)g(X) &= \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} (i+1)a_{i+1}X^i \right) \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i \right) \\ &= \sum_{i \in \mathbb{N}} \left(\sum_{s+t=i} (s+1)a_{s+1}b_t \right) X^i, \\ f(X)g'(X) &= \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i \right) \left(\sum_{i \in \mathbb{N}} (i+1)b_{i+1}X^i \right) \\ &= \sum_{i \in \mathbb{N}} \left(\sum_{s+t=i} a_s (t+1)b_{t+1} \right) X^i. \end{aligned}$$

さらに,

$$\begin{aligned}
 & \sum_{s+t=i} (s+1)a_{s+1}b_t + \sum_{s+t=i} a_s(t+1)b_{t+1} \\
 &= \sum_{s+t=i+1} sa_sb_t + \sum_{s+t=i+1} ta_sb_t \\
 &= \sum_{s+t=i+1} (s+t)a_sb_t = (i+1) \sum_{s+t=i+1} a_sb_t.
 \end{aligned}$$

これより, 係数を比較すれば, (iii) の等式が得られる. □

[定理 7.2] $f(X) \in R[[X]]$, $g(Y) \in R[[Y]]$ とする. このとき,

$$(g(f(X)))' = g'(f(X))f'(X)$$

が成り立つ.

[証明] $g(Y) = \sum_{j=0}^d b_j Y^j$ とおくと,

$$g(f(X)) = \sum_{j=0}^d b_j f(X)^j.$$

定理 7.1 より,

$$\begin{aligned}
 (g(f(X)))' &= \sum_{j=1}^d b_j (f(X)^j)' \\
 &= \sum_{j=1}^d b_j (j f(X)^{j-1} f'(X)) \\
 &= \left(\sum_{j=1}^d j b_j f(X)^{j-1} \right) f'(X) \\
 &= \left(\sum_{j=0}^{d-1} (j+1) b_{j+1} f(X)^j \right) f'(X) \\
 &= g'(f(X))f'(X)
 \end{aligned}$$

となる. □

[定理 7.3] $f(X) \in R[[X]]_0$, $g(Y) \in R[[Y]]$ とする. このとき,

$$(g(f(X)))' = g'(f(X))f'(X)$$

が成り立つ.

[証明] $g(Y) = \sum_{j=0}^{\infty} b_j Y^j$ とおくと,

$$g(f(X)) = \sum_{j=0}^{\infty} b_j f(X)^j.$$

各 $d \in \mathbb{N}$ に対して,

$$g_d(Y) = \sum_{j=0}^d b_j Y^j$$

とおくと, $\text{ord } f \geq 1$ より,

$$g(f(X)) \equiv g_d(f(X)) \pmod{\text{deg } d + 1}.$$

形式的微分を考えると,

$$(g(f(X)))' \equiv (g_d(f(X)))' \pmod{\text{deg } d}.$$

右辺に定理 7.2 を適用すると,

$$(g(f(X)))' \equiv g'_d(f(X))f'(X) \pmod{\text{deg } d}.$$

一方,

$$g'(f(X)) = \sum_{j=0}^{\infty} (j+1)b_{j+1}f(X)^j,$$
$$g'_d(f(X)) = \sum_{j=0}^{d-1} (j+1)b_{j+1}f(X)^j$$

であるから, 再び $\text{ord } f \geq 1$ より,

$$g'(f(X))f'(X) - g'_d(f(X))f'(X)$$
$$= (g'(f(X)) - g'_d(f(X)))f'(X) \in X^d R[[X]].$$

すなわち,

$$g'(f(X))f'(X) \equiv g'_d(f(X))f'(X) \pmod{\text{deg } d}.$$

ゆえに,

$$g(f(X)) \equiv g'(f(X))f'(X) \pmod{\text{deg } d}.$$

これがすべての $d \in \mathbb{N}$ に対して成り立つから, 定理 3.8 より,

$$g(f(X)) = g'(f(X))f'(X)$$

となる. □

[例 7.1] $\mathbb{Q}[[X]]$ において, $\exp(X)$ の形式的微分は $\exp(X)$ 自身である. 実際,

$$\begin{aligned} (\exp(X))' &= \sum_{i=0}^{\infty} (i+1) \frac{1}{(i+1)!} X^i \\ &= \sum_{i=0}^{\infty} \frac{1}{i!} X^i = \exp(X). \end{aligned}$$

[例 7.2] $\mathbb{Q}[[X]]$ において, $\log(1+X)$ の形式的微分は $(1+X)^{-1}$ である. 実際,

$$\begin{aligned} (\log(1+X))' &= \sum_{i=0}^{\infty} (i+1) \frac{(-1)^i}{i+1} X^i \\ &= \sum_{i=0}^{\infty} (-1)^i X^i = (1+X)^{-1}. \end{aligned}$$

[例 7.3] R を可換環とし, \mathbb{Q} を部分体として含むとする. また, $\alpha \in R$ とする. このとき, $R[[X]]$ において, $(1+X)^\alpha$ の形式的微分は $\alpha(1+X)^{\alpha-1}$ である. 実際,

$$\begin{aligned} ((1+X)^\alpha)' &= \sum_{i=0}^{\infty} (i+1) \binom{\alpha}{i+1} X^i \\ &= \sum_{i=0}^{\infty} \alpha \binom{\alpha-1}{i} X^i \\ &= \alpha(1+X)^{\alpha-1}. \end{aligned}$$

R を可換環とし, \mathbb{Q} を部分体として含むとする. $R[[X]]$ の元 $f(X) = \sum_{i=0}^{\infty} a_i X^i$ に対して, $R[[X]]$ の元 $\int f(X) dX$ を

$$\begin{aligned} \int f(X) dX &= \sum_{i=1}^{\infty} \frac{a_{i-1}}{i} X^i \\ &= a_0 X + \frac{a_1}{2} X^2 + \frac{a_2}{3} X^3 + \frac{a_3}{4} X^4 + \dots \end{aligned}$$

によって定める. $\int f(X) dX$ を $f(X)$ の形式的積分という. 定義から明らかに,

$$\frac{d}{dX} \int f(X) dX = f(X)$$

が成り立つ.

8 陰関数定理と逆関数定理

R を可換環とする.

$R[[X, Y]]$ の元 $f(X, Y) = \sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} a_{ij} X^i Y^j$ に対して, $R[[X, Y]]$ の元 $f_X(X, Y), f_Y(X, Y)$ を

$$f_X(X, Y) = \sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} (i+1) a_{i+1,j} X^i Y^j,$$

$$f_Y(X, Y) = \sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} (j+1) a_{i,j+1} X^i Y^j$$

によって定める. $f_X(X, Y), f_Y(X, Y)$ をそれぞれ $f(X, Y)$ の X, Y に関する形式的偏微分という. $f_X(X, Y), f_Y(X, Y)$ を $\frac{\partial f}{\partial X}, \frac{\partial f}{\partial Y}$ とも書く.

[定理 8.1 (陰関数定理)] $f(X, Y) \in R[[X, Y]]_0$ とし, $f_Y(X, Y) \in R[[X, Y]]^\times$ を満たすとする. このとき, ある $g(X) \in R[[X]]_0$ が一意的存在して, $f(X, g(X)) = 0$ が成り立つ⁴⁾.

[証明] $g(X) = b_1 X + b_2 X^2 + \dots$ の係数を, $f(X, g(X)) = 0$ を満たすように決めていく.

$$\begin{aligned} f(X, Y) &= \sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} a_{ij} X^i Y^j \\ &= f_0(X) + f_1(X)Y + f_2(X)Y^2 + \dots \end{aligned}$$

とおくと,

$$\begin{aligned} f_Y(X, Y) \in R[[X, Y]]^\times &\iff a_{01} \in R^\times \\ &\iff f_1(X) \in R[[X]]^\times. \end{aligned}$$

そこで,

$$h_i(X) = -f_i(X) f_1(X)^{-1} \quad (i = 0, 1, 2, \dots)$$

とおく. $f(X, g(X)) = 0$ が成り立つとすると,

$$0 = f_0(X) + f_1(X)g(X) + f_2(X)g(X)^2 + f_3(X)g(X)^3 + \dots$$

より,

$$g(X) = h_0(X) + h_2(X)g(X)^2 + h_3(X)g(X)^3 + \dots$$

$\text{ord } g \geq 1$ だから, $g(X)$ の 1 次項は $h_0(X)$ の 1 次項に一致する. これより, b_1 がただ 1 つに決まる. さらに, $i \geq 2$ に対して, 再び $\text{ord } g \geq 1$ より

$$g(X) - \left(h_0(X) + \sum_{k=2}^i h_k(X) g(X)^k \right) \equiv 0 \pmod{\deg i + 1}.$$

よって, $g(X)$ の X^i における係数は $h_0(X) + \sum_{k=2}^i h_k(X) g(X)^k$ の X^i における係数と一致する. すなわち,

$$b_i = (h_0(X), h_2(X), \dots, h_i(X)) \text{ の係数と } b_1, b_2, \dots, b_{i-1} \text{ との多項式}$$

なる形に書ける. b_1, b_2, \dots, b_{i-1} がすでに決まっていれば, b_i を一意に定めることができる. これより, $g(X)$ の存在と一意性がいえる. \square

⁴⁾逆に, $f(X, g(X)) = 0$ なる $g(X) \in R[[X]]_0$ が存在するとき, 係数を比較すると, f の定数項は 0 になる.

[定理 8.2 (逆関数定理)] $f(X) \in R[[X]]$ とする. このとき, 次の 2 つの条件は同値である.

- (i) ある $g(X) \in R[[X]]_0$ が存在して, $f(g(X)) = X$.
- (ii) $f(X) \in R[[X]]_0$ かつ $f'(X) \in R[[X]]^\times$.

さらに, もし条件 (i) が成り立てば, $g(X)$ は一意であり, $g(f(X)) = X$ も成り立つ.

[証明] (i) \Rightarrow (ii) $f(X) = \sum_{i \in \mathbb{N}} a_i X^i$, $g(X) = \sum_{i \in \mathbb{N}} b_i X^i$ とおく. $f(g(X)) = X$ の定数項と 1 次の項を比較すると, $a_0 = 0$, $a_1 b_1 = 1$ となる. よって, $f(X) \in R[[X]]_0$, $a_1 \in R^\times$. 2 番目の条件は $f'(X) \in R[[X]]^\times$ と同値である.

(ii) \Rightarrow (i) $F(X, Y) = X - f(Y)$ に対して定理 8.1 を適用すると, ある $g(X) \in R[[X]]_0$ が一意に存在して,

$$X - f(g(X)) = F(X, g(X)) = 0.$$

すなわち, $f(g(X)) = X$. ここで, $g(X)$ の一意性は (ii) が前提になっていることに注意せよ. いまの場合, (i) \Rightarrow (ii) が成り立つことはすでに示されているから, (i) が成り立てば $g(X)$ は一意である.

さらに, (i) における $g(X)$ は条件 (ii) を満たすから, 再び上の議論より, ある $h(X) \in R[[X]]_0$ が存在して $g(h(X)) = X$ となる. このとき, $f(g(X)) = X$ の X に $h(X)$ を代入すると,

$$f(X) = f(g(h(X))) = h(X).$$

したがって, $g(f(X)) = X$. □

[補題 8.3] (i) $\exp(X + Y) = \exp(X) \exp(Y)$ が $\mathbb{Q}[[X, Y]]$ において成り立つ.

(ii) $(\exp(X))^{-1} = \exp(-X)$ が $\mathbb{Q}[[X]]$ において成り立つ.

[証明] (i) $X + Y \in \mathbb{Q}[[X, Y]]_0$ なので, $\exp(X + Y)$ は $\exp(X) \in \mathbb{Q}[[X]]$ の X に $X + Y$ を代入したものととして $\mathbb{Q}[[X, Y]]$ において定まる.

$$\begin{aligned} \exp(X + Y) &= \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} (X + Y)^k \\ &= \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} \left(\sum_{s+t=k} \frac{k!}{s!t!} X^s Y^t \right) \\ &= \sum_{k=0}^{\infty} \left(\sum_{s+t=k} \frac{1}{s!t!} X^s Y^t \right). \end{aligned}$$

一方, $\mathbb{Q}[[X, Y]]$ において, 形式的冪級数の定義にしたがって計算すると,

$$\begin{aligned} \exp(X) \exp(Y) &= \left(\sum_{i=0}^{\infty} \frac{1}{i!} X^i \right) \left(\sum_{j=0}^{\infty} \frac{1}{j!} Y^j \right) \\ &= \sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} \frac{1}{i!j!} X^i Y^j. \end{aligned} \tag{10}$$

各 k に対して, (10) の中に現れる k 次の項すべての和は $\sum_{s+t=k} (1/s!t!)X^sY^t$ であるから, すべての整数 $d \geq 0$ に対して

$$\sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} \frac{1}{i!j!} X^i Y^j \equiv \sum_{k=0}^d \left(\sum_{s+t=k} \frac{1}{s!t!} X^s Y^t \right) \pmod{\deg d + 1}.$$

定理 3.8 より,

$$\sum_{(i,j) \in \mathbb{N}^2} \frac{1}{i!j!} X^i Y^j = \sum_{k=0}^{\infty} \left(\sum_{s+t=k} \frac{1}{s!t!} X^s Y^t \right).$$

したがって, $\exp(X + Y) = \exp(X) \exp(Y)$.

(ii) Y に $-X$ を代入すると,

$$1 = \exp(0) = \exp(X - X) = \exp(X) \exp(-X).$$

ゆえに, $(\exp(X))^{-1} = \exp(-X)$. □

[定理 8.4] R を可換環とし, \mathbb{Q} を部分体として含むとする. このとき, 任意の $\alpha \in R$ に対して,

$$\exp(\alpha \log(1 + X)) = (1 + X)^\alpha$$

が成り立つ. 特に, $\alpha = 1$ とすれば,

$$\exp(\log(1 + X)) - 1 = X$$

が得られる.

[証明] $f(X) = (1 + X)^\alpha \cdot \exp(-\alpha \log(1 + X))$ とおく. これの形式的微分を計算すると,

$$\begin{aligned} f'(X) &= \alpha(1 + X)^{\alpha-1} \cdot \exp(-\alpha \log(1 + X)) \\ &\quad + (1 + X)^\alpha \cdot \exp(-\alpha \log(1 + X)) \cdot (-\alpha)(1 + X)^{-1} \\ &= 0. \end{aligned}$$

R が \mathbb{Q} を部分体として含むので, 0 でない整数はすべて R における単元であり, したがって零因子ではない. ゆえに, 任意の整数 $m > 0$ と R の任意の元 $a \neq 0$ に対して $ma \neq 0$ となる. このことから, $R[[X]]$ においては, $f'(X) = 0$ ならば $f(X)$ は定数である. $f(X)$ の定義式における定数項を見れば $f(X) = 1$ がわかる. ゆえに,

$$\exp(-\alpha \log(1 + X))^{-1} = (1 + X)^\alpha.$$

左辺に補題 8.3 を用いれば, 求める等式が得られる. □

参考文献

- [1] 藤崎源二郎: 体とガロア理論, 岩波書店, 1997.
- [2] ブルバキ (倉田令二郎, 清水達雄訳): 数学原論 代数 4, 東京図書, 1969.

索引

英数字		ま	
Laurent 展開	22	無限和	17
あ		や	
値	20	有理関数体	21
位数	15	有理式	21
か		ら	
形式的 Laurent 級数	22	零点	20
形式的積分	26		
形式的微分	22		
形式的冪級数	11		
形式的冪級数体	21		
形式的偏微分	27		
係数	10		
項	10		
根	20		
さ			
次数	10, 19		
斉次多項式	19		
総和可能	17		
た			
代入	18		
多項式	19		
多項式環	19		
定数	3		
定数項	10		
展開	21		
同次多項式	19		
は			
不定元	9		
変数	9		